所　報

No.25

佐賀県教育センター

佐賀県佐賀郡大和町川上

TEL 09526－2－5211

もくじ

○　基礎学力向上と教育センター …… 所長 1

○　基礎学力を育てる指導・工夫 …… 2～3

・ことばを鍛える …… 2～3

・意欲的な学習を展開する課題設定 …… 3～4

・個人差に対応した授業の設計 …… 5

・学業指導について …… 6

・学習意識の実態とその一考察 …… 7～8

・"書く" 指導の着眼点 …… 9～10

・学習意欲が向上した非行N男の事例 …… 10～12

・紹　介 …… 13～14

基礎学力向上と教育センター

佐賀県教育センター所長　杠　　茂

佐賀県は，昭和51年，若楠国体開催の成功によって大きな自信と勇気を得ました。この貴重な体験をもってすれば，知育の面でも持てる力を伸ばしきることができるに違いない。更には，明治維新そして大正・昭和にかけて日本の中の佐賀県人として持っていた誇りを「教育県佐賀」の名でよみがえらせたいとの願いをもこめて，県教委ではさっそく翌年から基礎学力向上対策事業を進めることになりました。

「教育は人なり」という考えから，当教育センターが53年度に着工されたのもその一つでした。その後諸施策が着々と講ぜられましたので，一応概念的には基礎学力向上についての構えは定着したものの，なにぶんにも課題が大きく，内容が多岐にわたるため，いろいろな点で試行錯誤を続けながら地道に積み上げていくことが肝要かと思います。

さて，一人ひとりが生き甲斐を感じ，国民としての役割が果たせる人づくりのための学校教育はどうあるべきかを考えますとき，学校での授業が，あれも教え，これもつめこまねば子どもが困るという発想は既に過去のものだと思います。これからの教育のあり方は，小・中・高等学校それぞれの段階における「学び方」と「学びとる力」の基礎と基本に重点をおいたものであるべきだと考えます。そのためには，まず教師が子どもを熟知し，教材を研究してこの子どもに今，必要なものは何か，この子ども自らが学びとれるものは何かを見定めた上で学習内容を精選することからはじまると思います。つまり，わからないで困っている子どもの苦しみや，もっと伸びてくれと念じている親の願いに応え，かつ，子どもの学びとる力として確実に身につくような授業研究が本気で考えられねばなりません。

当センターでは，開所以来この問題を重点課題として，とりくみ，逐次その成果を研修講座等でとりあげてきましたが，ここに改めてその一端を紹介してご参考に供すべく，特集号を刊行しました。

このような授業づくりを私どもセンターと一緒になって考えてみようと思われる方々のご参加を期待しています。

基礎学力を育てる指導・工夫

小学校国語科

ことばを鍛える

所員　栗　山　繁　治

「ことばをみがくことは，こころをみがくこと」―― みがくということは，そのものを大切にし，そのものに愛情をもっていることですね。どうぞ，ことばを大切にし，ことばへの愛情をもちつづけていってください。それは，ことばをそのはしばしまで正しく使うことでしょう。どんな小さいきずもつけないように使うことでしょう。そして，ゆたかに使いこなして，もしことばに，人間のような心があったら，自分は役立っているなと感じさせることでしょう。話されたり聞かれたり，読まれたり書かれたりしながら。――

これは，大村はま先生の「国語教室通信」の中に出てくる子どもたちへの便りの一節である。やさしい表現とあたたかい心遣いで，しかも，きびしくこれほど確かに国語教育の眼目を語りかけられている文章はまれである。

わずか一つのことばを理解するにしても，表現するにしても，そのことばのもっている深い意味や働きを知りつくし，そのことばでなければという，かけがえのない手応えを感じながら使おうとする。そういう態度が言語の力を培う土台になる大切なことだと問いかけていらっしゃるのではないか。

これは，まさしく言語の基礎学力そのものであり，基本的態度である。

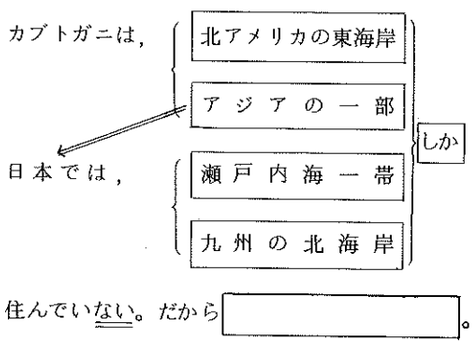
小学校四年生の読みの学習指導（教材「カブトガニ」）が次のように展開されたとしよう。

> (1)
> ①カブトガニは，北アメリカの東海岸と，アジアの一部にしか住んでいない，めずらしい動物です。②日本では，瀬戸内海一帯や九州の北の海岸などに見られます。

この冒頭の(1)段落は，カブトガニの生息地についての説明であるが，まず，読みの基本を(1)の段落全文を暗誦するまで音読することにおいてみる。これは，この段落に限らず，短い文章なら全文暗誦，長いものならその全体のあらましが物語れるというめあてに立って，くり返し読むという基本的な仕事である。

次に，この(1)の段落を正確に視写し，①・②とセンテンス番号をつけ，二つの文の意味づけをするために，重要語句の吟味をする活動を仕組む。視写した文章の中で，「アジアの一部」（「日本では」とのかかわり）「しか」「めずらしい」「日本では」「九州の北の海岸」（「佐賀県」とのかかわり）などに着目，傍線をひき，カブトガニは，めずらしい動物です。という中心文の発見へ結びつける。

さらに，その＜めずらしさ＞がどこにあるかという問題意識をもって，内容がくわしく読みとれていかねばならない。それは(2)以下の段落への課題でもある。そのために，大切な語句の意味上の対応関係を文図化することによって，視覚的にきわ立たせることもできる。



ここで＜めずらしさ＞のきめ手になる重要語句「しか」の働きに着目させなければならない。

・「しか」ということばで短文作りをする。
・「しか」はどんな意味，働きをもつか。
・「しか」のあとには必ずどんなことばがつくか。（呼応）
・だから，ここでも「しか」があるために，どんなことがわかるか。などの吟味がなされていくことになる。加えて，もし「住んでいない。」を「住んでいる。」と書くとしたら「しか」は，どういうことばに変えねばならないか，ゆさぶりをかけると，言語思考は，さらに「だけ」の発見を促し，語いの拡充へ発展する。

どんなに小さな一つの語句であっても，その意味や働き，他の語句との結びつきやひびき合いを比較，吟味しながら文章全体の意味内容を促えていく読みとりの方法や態度が身についていかなければ，生きて働く力としての言語力は育っていかない。

(1)の段落では，子ども一人ひとりの作業を通しながらも，全体での吟味を中心に，読みとっていく手順に重きをおく。(2)の段落では，個人の学習結果（読みとりの内容と問題点）を小集団で練りあげていくところに傾斜をかけ，(3)以下の段落の読みは，子どもたちの自力での読みの活動ぶりを評価していくことを大切にしていく。

このように，段階を追いながら，一つ一つ身につけていく学び方が，ほんとうに活用されているかどうかチェックされ，抵抗の多い場合には直ちにフィードバックしながら念をおす治療が行われなければ，ひとり立ちは期待できないことになる。もちろん，強い問題意識に支えられながら，興味・関心を持ちつづけ，読みすすめていくためには，そこに教師の指導技術の工夫，力量が問われることは言うまでもない。

「表現」「理解」いずれの領域の学習指導にしても，もっとも基本的に学習の土台になることは，ことばの意味や働き・価値について，自らの力で――みつける――わかる――おぼえる――くらべる――えらぶ――つかいこなす場に，子どもたちを立たせ，鍛えることである。

小学校算数科

意欲的な学習を展開する課題設定

所員　日　高　和　之

「どうすれば，子どもたちが，意欲をもって学習に取り組むだろうか。」という悩みは，教師のだれもが持っていることと思う。意欲（動機づけ）をもたせる方法として，賞や罰を与えたり，競争という，いわゆる外的動機づけによって，子どもを学習にかり立てるのも有効な手段に違いない。しかし，この外的な動機づけから内発的動機づけ，すなわち，学習そのものに対する好奇心や興味によって学習行動がなされてこそ本当に意欲的な学習がなされたといえる。

こういう意味からすると，学習指導法も，教師が子どもに知識を伝授すべく解説するといった解説型の授業ではなく，子どもを積極的な知識の探究者と考える，いわゆる探究型の授業設計がよいといえる。発見学習や問題解決学習などは，この探究型の学習指導法といえる。

発見学習にせよ，問題解決学習にせよ，１時間１時間ないし，単元全体の学習において，子どもたちを意欲的に，ねばり強く取り組ませる要因の１つは，子どもたちが解決意欲を起こすような課題を設定することにあるといえる。

教材そのものが感動性の高い社会科や理科などの教科に比べて，算数科は，教材そのもののもつ感動性は弱いように思う。それ故に，その教材をどう取り扱うかという教師の力量によって，子どもの追求意欲が大きく左右される。同じ教材であっても，展開のし方によっては，おもしろくない，いわゆる感動性のない授業にもなるし，反対に，すばらしいドラマに変わることもある。

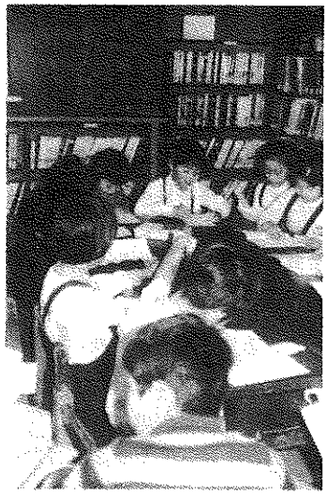
元来，子どもは，知的欲望が大きいといえる。それは，幼児が，父母に「これなあに？」「どうして？」と，ありとあらゆる物に興味を示すことからもわかる。その好奇心をゆり起こすような課題を設定することが出来たら，学習活動の大半は成功したと言っても過言ではなかろう。以下，２例だけではあるが，課題設定の場面を

中心に，具体例を示してみたい。

＜事例その１＞３年「三角形の内角の和が180度になることの指導」

「紙に，３つの角の和が一番大きくなるような三角形と一番小さくなるような三角形をかきなさい。」という問題を提示する。そうすると，とまどいながらも，大部分の子どもは，大きい三角形と小さい三角形をかいて，大きい三角形程，内角の和も大きく，小さい三角形程，内角の和も小さいとした。他に，鈍角三角形と鋭角三角形をかいている子や，「三角形の内角の和は，180度ときまっているので，三角形はかけません。」と発言する子もいた。話し合いのすえ，「どんな三角形でも，３つの内角の和は，180度だろうか。」という課題を設定した。そして，この課題を確かめる方法について話し合い，次にプリントにかかれた，いろいろな形や大きさの三角形について，分度器で測ったり，折ったり，角を切り取って１カ所に集める方法で，内角の和が，180度であることを一般化した。

実態調査の結果では，６２％の子どもが，内角の和が180度であることを知っており，このような場合，とかく学習内容に対して，子どもたちは，意欲をしめさないことが多い。そこで，ここでは，「内角の大きさが一番大きい三角形と一番小さい三角形をかきなさい。」という問題を投げかけることによって，「おや，おかしいぞ。」「内角の大きさは，三角形の形や大きさで変わるのかな。」といった疑問を起こさせ，その中から，「どんな三角形でも，内角の和は，１８０度になるだろうか。」という共通の課題をつくり出したのである。



みずから学ぶ子どもの目は輝いている

＜事例その２＞３年「円」

（指導内容）円とその中心，半径，直径などの用語と共に，それらの関係を知らせる。コンパスを使って円のかき方に慣れさせる。

小単元「円」の４時間を通した問題「よく回るコマを作って競争しよう。」を投げかけた。（この場合，必要な材料は，与えるが，コンパスは使わないで作ることを約束させた。）子どもたちは，厚紙にコップなどを使って，おもいおもいの円をかき，コマを作って盛んに回す競争を始めた。よく回るコマもあるし，すぐ傾いて倒れるコマもある。傾くのは，中心のきめ方が悪いからだという意見が多く出て，第１時の課題，「どうすれば，円の中心を正しく見つけられるだろうか。」を設定した。子どもたちは，紙を４つに折ったり，糸や定規を使って，中心を見つける方法を盛んに試みた。この活動の中から，半径と直径の関係や円が大きくなると，半径や直径も長くなることなどをとらえることが出来た。

第２時は，よく回る条件に，円の大きさも関係するということから，「円の半径がわかれば，どんな大きさのコマも作れるか。」という課題が生まれ，コンパスを使って，いろいろな大きさの円をかき，よく回るコマ作りへと発展していった。さらには，直径と円周の関係へと自然に学習が進められた。（３時以降は紙面の都合で省略）

事例その１では，既有知識と矛盾するような情報を意図的に提示したことによって，子どもの知的好奇心が刺激され，その矛盾を解決するための課題だったこともあって，あとの学習が，自主的に，意欲的になされた。事例その２では，単元を通しての問題「よく回るコマを作ろう。」が，子どもたちにとって，興味ある内容であったために，子どもたちの間から課題が，生み出され，単元の最初から最後まで，操作を中心にした。活気のある学習がなされた。

学習評価

個人差に対応した授業の設計

所員　角田研三

昭和５５年度　佐賀県教育センターの研究の一分野として，小学校４年生の社会科用のビデオ教材「成富兵庫茂安」を制作した。これを３クラス，109人の児童に見せ，内容に対する感想を自由に書かせたところ，109種類といえるほど，多種多様の答えを得た。この多種多様な応答こそ授業のむずかしさを雄弁に語りかけている。この個人差に対応して，授業をどう設計し，指導のねらいを達成するかが，専門職の教師に課せられた大きな問題であると考える。

教師がこの授業に関する課題を解決するには次に挙げる３点が鍵になるだろう。

1. 目標を明確にする

授業の実際の場面で，児童の多種多様な応答に対応するためには，指導の目標を明確にすることが必要である。

例えば，「成富兵庫茂安」の授業では，江戸時代の人々の生活や工事に用いた道具や技術及び土地の条件の面から理解させることが認知的な面のねらいである。

認知面の目標を達成させるために，ＶＴＲの映像や佐賀県地図，その他の資料を単独あるいは結びつけて，ことがらの意味を解釈する。いわゆる資料活用の能力の育成も大切なねらいの一つである。

また，「成富兵庫茂安」の一連の授業を通して，佐賀県の発展を願うという情意的な面も重要なねらいである。

最近，行動目標とか目標行動ということばをよく耳にするが，これは，前記の目標を具体的に表現する上で有効な方法の一つであろう。

2. 教材内容を明らかにする

指導のねらいを達成するためには，具体的な教材が必要である。その教材の内容について，教材の構造や系統性などを明らかにすることも大切である。

3. 評価計画をたてる

多種多様な応答に対応しながら指導のねらいを達成するためには，児童・生徒の実態を知ることも大切である。その児童・生徒を知るための計画が評価計画である。冒頭の教材「成富兵庫茂安」の授業では，次のような評価計画が考えられる。

(1) 診断的評価

３年生の社会科で学習した佐賀県の土地のようす，特に脊振山地や嘉瀬川，佐賀平野などの位置や形など学習の前提になること及びこれから学習する成富兵庫茂安の人物や業績などを調べて（診断的評価），指導のねらいが達成できるように準備すること。

(2) 形成的評価

授業（学習）の進行中に，石井樋の構造や洪水を防ぐしくみの存在について理解できたか。あるいは，石井樋及び遊水地が地形と深く結びついていることを理解できたかなどを調べて（形成的評価），再学習をし指導のねらいを達成させること。

(3) 総括的評価

(1)，(2)を十分に活用して授業をしたあと，児童・生徒の実態を調べる（総括的評価）こと。

授業（学習指導）を効果的に進めるためには何を（教材），何のために（目標）を明確にするとともに，児童・生徒の実態をいつ，どのようにしてつかむかを具体的に計画をたてて，それを生かしながら日々の実践を行うことが大切だと考える。

小学校の学業指導

はげましと子ども理解と

所員　小　嶋　一　郎

学習指導が各教科の内容について直接の理解や技能の開発深化を対象とするのに対して，学業指導はこども自身の学業生活がより意欲的に，より効率的になるように教師が側面から指導援助することです。

中学校・高等学校では，特別活動の学級指導，ホームルーム指導の中に「学業生活の充実に関すること」として，特に学業上の不適応の解消・学習の意欲や態度の形成をはかる内容の指導が授業の形で行われます。

このことについては，昨年度佐賀県教育委員会から中学校・高等学校を対象に「学業指導の手引」が刊行されました。しかし，小学校での学業指導については，その考え方やすすめ方については今日まで研究や実践報告はほとんどありません。そもそも，学業指導という用語さえ小学校ではいまだに定着していないありさまです。

小学校特別活動の学級指導の内容としては，学業指導を特段にとりあげることにはなっていません。ただ，「学級生活や学校生活への適応指導」「学校図書館の利用指導」などにその類似的なものがあり，学業指導的指導も可能ではあります。しかし，実際には学級指導の中で学業に関する指導はほとんど行われておりません。

また，このことから小学校での学業指導が必要ないということではなく，むしろ大切なことです。中学校や高等学校のように指導の時間は特定しにくいけれども，ちがった場面での学業指導を考えなければなりません。

その第１の場面は，教科指導（学習指導）の中で学業指導的配慮をすべきだということでしょう。学習の主体者としてのこどもの意欲高揚や充足感を満たすために，授業時間中により多くの手だてを準備することが大切です。

(1)　発問を工夫して間をもってこどもの発言を待つ。そして熱心に傾聴する。

(2)　ひとりの発言を全体に明示したり，不明瞭な点は教師自身も受けとり方を確認したりしてこどもどうしの連鎖的発言をうながす。

(3)　発言が特定のこどもに固定しないように配慮し，誤答したこどもを大切に扱い，もう一度発言のチャンスを与えるなどの配慮をする。

(4)　つぶやきや表情の変化などをにがさずにとらえて授業の中に生かし，特に賞賛や激励を与えるよう心がける。

などが考えられます。

第２の場面としては担任教師の学級経営にかかわることです。教師が一人ひとりのこどもを理解しようとする努力とその結果得られるラポートの成立が学業指導の基本となります。例えば，ある教育機関で調査したところによると，学校で「いまからの１時間を自由に使いなさい。」といわれたらどうするかという問いに，こどもの多くが「先生とおしゃべりする時間にしたい。」と答えたという結果もあります。このことから次のような点に努力したいものです。

(1)　大声でこどもといっしょに笑いあう。

(2)　ひまをみつけて，少しでも多くのこどもと遊ぶ。

(3)　登下校の途中こちらからこどもに声をかける。また，１日のうちどのこどもにも声をかける。

(4)　しかる前にこどもの言い分を傾聴する。たとえ，いやな腹の立つ発言や都合のわるい発言もよくきいてやる。

(5)　問題をもつこどもへの接触を優先する。

以上，小学校における学業指導について，教科指導の場面と学級経営上の教師の心がまえの場面にわけて述べてみました。この二つの場面は別個のものではなく本来的には一体です。

こどもがよろこんで登校し，しかも，学ばずにはいられない状況をつくり出す教師の手だてこそ学業指導の原点というべきでしょう。

中学校社会科

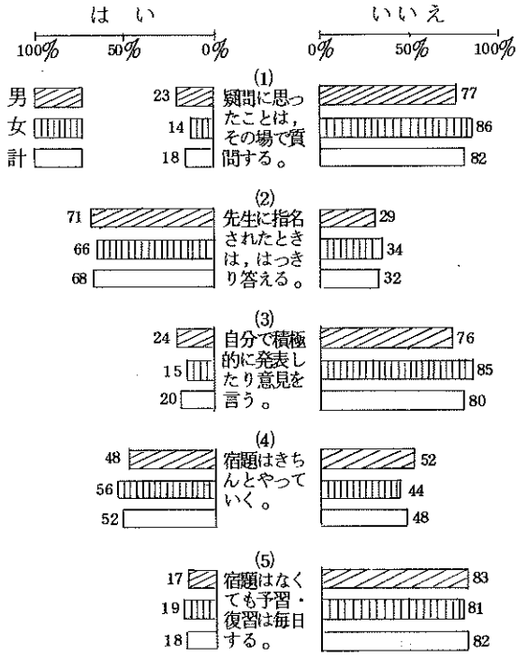
学習意識の実態とその一考察

所員　桜　木　末　光

新しい学習指導要領に改訂されて，この間２年の移行期間を経て，いよいよ中学校では４月から新教育課程が実践に移されることになる。

そこで社会科の学習においても当面の課題を整理し，新しい趣旨にそった指導計画や指導が展開されなくてはならない。ここでは，生徒の学習意識の実態を中学２年生 283 名(男 151 名，女 132 名)を対象にして昭和55年11月に調査し，学習指導法の改善に役立てようと考えた。

1. 社会科の授業でひごろあなたはどうやっていますか。

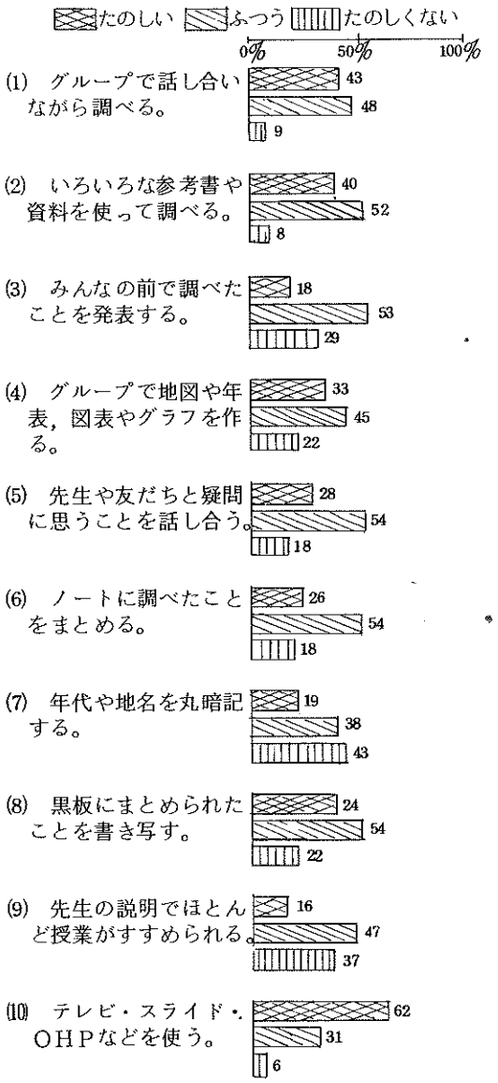


学習意欲の一端をとらえようと試みて上記のような問いをしてみた。(1)・(3)の結果からは，授業に対する積極性に欠け，また(2)の結果と合わせて考えると授業に対する構えが受動的である。

(5)の結果も含めて全体的に自主性に欠けているといえよう。生徒一人ひとりを積極的に授業へ参加させるためには，教師は何をなすべきかを，問い直されなければならない。生徒が積極的に学習に取りくめる場の設定，自主的に，主体的に考え操作するための問題意識（課題）の与え方等についても工夫をする必要があろう。

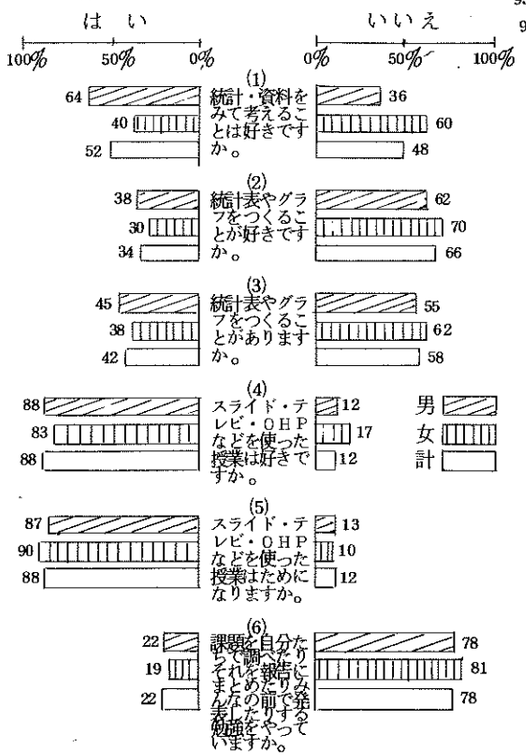
従って，次からの質問 2. 3 は１の項の問題点の解明をはかろうとするものである。

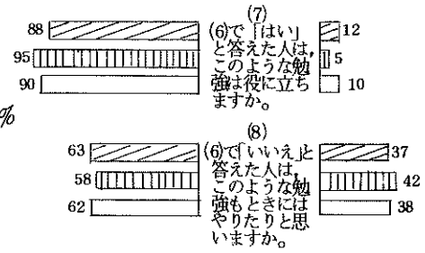
2.　あなたは，社会科の勉強を次のような方法でやるとき，どう思いますか。



(1)～(5)，(10)は質の高い授業，(7)～(9)は逆の型と想定して調査してみた。予想通りの結果が出てきた。授業で調べたり，先生や友だちと話し合ったり，作ったりすることを生徒たちは望んでいる。(3)については，生徒の発達段階における心理的な面もあろうが，そういう習慣が身についていないという考え方もできよう。

3. 地理の授業で，あなたが考えていることや，授業でやっていることについて答えて下さい。





ここでは，生徒たちがどのような授業を望んでいるか調べてみた。地理の授業をもとに場面設定をしてみた。２の項で，生徒たちは，調べたり，作ったり，発表したりする授業は楽しいと答えているが，この項の(6)では，実際の授業では，このような学習方法が取り入れられていない。「課題を自分たちで調べたりそれを報告にまとめたり，みんなの前で発表したりする勉強」をやっている人は，役に立つと答え，このような学習をやってない人の６割がときにはやりたりと望んでいる。このことは社会科の教師としてどう受けとめるべきなのだろうか。生徒がわかる授業とはどんな授業なのかもう一度生徒に問うてみる必要があろう。（この調査の詳細については，昭和５５年度中学社会の研究紀要でまとめる。）

所員　桜　木　末　光

"生徒に読ませたい詩"

夕焼け

吉野　弘

いつものことだが電車は満員だった。
そして　いつものことだが
若者と娘が腰をおろし　としよりが立っていた。
うつむいていた娘が立って　としよりに席をゆずった。
そそくさととしよりが座った。
礼も言わずにとしよりは次の駅で降りた。
娘は座った。
別のとしよりが娘の前に　横あいから押されてきた。
娘はうつむいた。しかし　又立って
席をそのとしよりにゆずった。
としよりは次の駅で礼を言って降りた。
娘は座った。二度あることは　と言う通り
別のとしよりが娘の前に
押し出された。
可哀想に娘はうつむいてそして　今度は席を立たなかった。
次の駅も　次の駅も
下唇をキュッとかんで　身体をこわばらせて――。
僕は電車を降りた。
固くなってうつむいて　娘はどこまで行ったろう。
やさしい心の持主は　いつでもどこでも
われにもあらず受難者となる。
何故って　やさしい心の持主は
他人のつらさを自分のつらさのように感じるから。
やさしい心に責められながら　娘はどこまでゆけるだろう。
下唇をかんで　つらい気持で美しい夕焼けも見ないで。

高校英語科

"書く"指導の着眼点

所員　山　下　一　夫

昭和５２年度に佐賀県教育委員会が行った「学習状況に関する実態調査」の高校２年生を対象とした調査結果によると次のようになっている。

（英　語）	全体	普通科	職業科
中１程度の問題の正答率	71.7	88.2	52.8
中２　〃	66.3	82.4	47.9
中３　〃	45.3	67.4	20.0
高１　〃	30.5	43.1	16.1

つまり中１，中２程度の問題で７割，中３程度は５割の正答率である。

また，昭和５３年に佐賀県高等学校教育指導研究会が出した「教育研究開発に関する調査研究報告書」によると，昭和４９年から５２年までの高校入学選抜学力検査の英語の領域別正答率は，４年間の平均で「聞く・話す」６１.４％，「読む」５４.１％，「書く」４３.９％となっていて「書く力」は概して弱い。

従って，ここでは高校２年生で中３程度の問題が半分しかわかっていないこと，しかも三領域の中では「書く」ことが弱いことをふまえて「書くことの指導」について考えてみたい。

1. 生徒の実態にあった書く指導をすること。

長野県教育センターの吉越氏は「書くこと」を次の１５の段階に分けている。

①Tracing	書記再生訓練
②Copying	書記再生訓練
③語代入	文字再生訓練
④語句転換	文字再生訓練
⑤音声・スペリングの連合	文字再生訓練
⑥Cictation	文字再生訓練
⑦語のならべかえ	パターン再生訓練
⑧文転換	パターン再生訓練
⑨Composition Frameによる作文	パターン再生訓練
⑩単文の生成	操作訓練
⑪単文の連鎖	操作訓練
⑫文連結	操作訓練
⑬パラグラフの生成	運用訓練
⑭内容要約	運用訓練
⑮記述説明	」

各学校で高校入試や学力テストあるいは自作テストの結果を十分分析して生徒がどこでつまずいているかを発見し，上記のどの段階から指導したらよいかを十分検討して指導することが重要である。実態分析を十分行わないまま指導しても学習効果は上がらない。指導の段階を考えることは担当教師として大切なことである。

2. 中学校での既習文の整理をすること。

中学校での既習文の理解や定着が不十分な場合には，中学時の使用教科書のKey Sentenceもしくは文中に出てくる重要構文，高校での学習事項に転移できると思われる文などを整理して生徒に配布し４月，５月の入門期にその例文を暗写できるように指導することが必要である。

県内のある商業高校では，中学校での使用教科書から基礎的な文法事項を分類して１３ページからなる「中学英語教科書の文法事項」にまとめ生徒に配布している。それには文末に，何年生のどこのレツスンで出てきたかが明示され学習のべんぎをはかっている。

また，ある普通科の高校では中学１年生の教科書より２２文，中２より６７文，中３より５０文，それに不規則動詞の活用７４をまとめて「中学英語の復習」として生徒に合格者登校日に配布し春休みに復習するよう指示するとともに４月，５月で徹底的に上記１３９文が書けるように指導している。ここで大切なことはその学校の生徒のレベルに応じて例文を選択することである。１で述べたように難易の段階を常に頭において例文の長さや語いを決めるべきである。

3. 同一文を何回でも書かせること。

高校１年生普通科の生徒で７語ぐらいの文しか教師のあとについて正確にRepeat できない。14語以上になると非常に難しいと言われている。まして「正確に書くこと」となるとさらに難しいということを教師は認識しておくべきであろう。

一般的には同じ文章を５～６回書けば定着率は高いと言われている。ある高校では英作文の問題を毎週月曜日に５０題テストして８５点以上とらないと追試という形で同一問題を５回行った結果ほとんど全員５回目には８５点の線は越えるという報告もある。何度も何度も「くり返し」書かせると定着率は高まる。

また，ものを記憶するには多くの感覚器官を使えば定着率は高いと言われている。「言いながら書く」と手と目と口と耳を使うことになり効果的である。

4. 自由英作文のすすめ。

昭和５４年度の当教育センターの研究紀要で報告したとおり，生徒は「和文英訳」は嫌いであるが「自由英作文」は好きだという。県下の普通科高校４校１８０名ほどの１年生を対象とした調査では，５０間で平均１１.５センテンス１センテンス7.１０語しか書けなかったのに「自分の考えで書けた」ということですこぶる満足していた生徒が多かった。この生徒の喜びの気持を大切にしてやりたい。教材に生徒自身の考えや体験が投影できたとき，すなわち，生徒の考えや体験が「書く」領域において言語活動として生かされたとき生徒は喜びを覚える。自由英作文は１の書く段階でいうと⑮の記述説明に当たり，最も高度なものである。中学校での既習Key Sentence，重要構文を徹底的に書かせて自分のものにさせたあとでは，「自分の気持を述べた作文」を書くことは難しいことではない。自由英作文は評価がめんどうという先生も多いが生徒にとっては大きな英語学習への動機づけとなりうる。

以上，四つほど「書く」ことの指導の着眼点を述べた。「書く」ことは「聞く」「話す」「読む」の他の領域と比較すれば最も「高度な」「最終の」領域と言われるが，それを逆に「最も根本的な基礎的な」領域だと考えることも大切ではないだろうか。

教育相談・高校

学習意欲が向上した非行N男の事例

所員　野　方　俊　彰

はじめに

学校教育相談は，問題をもっている生徒の診断と治療だけでなく，学校生活において生徒達の心の中の悩みごとに対応することも重要である。

問題生徒に対してどのように治療的にかかわるかは，社会的地域的問題，社会教育の問題，家庭教育の問題などあるけれども，その中で学校教育の果たす役割が極めて大きいことは言うまでもない。その数多くの問題の中で，特に肝心なことは，非行生徒や非行集団をどのように理解するかにかかっている。

事　　例

N男（高等学校普通科３年）のケースは，高校入学時特に問題もなく，高校生活は友人も多く真面目な生徒であった。しかし，２年次より３年次にかけて，教師への反抗，交友関係の悪化，飲酒，同級生への金銭強要，無免許運転，深夜はいかい等の問題行動を繰り返した。生活指導部は，教育相談係，ホームルーム担任と話し合い，学校の指導では限界があるとして，専門の治療機関である当教育センターに教育相談を依頼されたのである。その結果，８ケ月間のカウンセリングにより，しだいに非行が消失し，平行して学習意欲がたかまり，成績が向上したのである。

1. 学庭と生育歴

(1) 家族構成　父（会社員），母（会社員），兄（大学生），祖母，本人の５人家族

(2) 生育歴

○乳幼児期，特に異常もなく，発育良好であった。ただ，５才時にコタツの中に落ち，ガス中毒を起こし，生命はとりとめたものの，それ以来周囲の大人達が神経質になった。

○学童期，交友関係も広く活動的であった。特に，高学年に従って成績も向上し，６年生では児童長として級友の面倒みもよく，立派に責任を遂行している。中学時代は落着きのない生徒であったが，３年次にサッカークラブに入部してから安定し，高校入試のために勉学にはげんだのである。

(3) 養育態度

N男の養育の主体は祖母であり，甘やかされ，過保護に育てられた。母親は，祖母の養育に不満をもちながらも，直接言う気力はなく，父親に愚痴をこぼしていた。また，父親は日頃無口であるが，酒を飲むと愚痴・小言が多く，その反面N男が問題を起こすと，興奮し，厳しく叱責するといったように，しつけに一貫性がなかった。

2. 指導経過

２・３年次と教師の再三にわたる指導を無視し，非行を繰り返すN男に対して，「退学」という声さえ教師間にあったけれど，生活指導部・教育相談係・ホームルーム担任等との再三の協議の結果，家庭の協力を得るとともに，N男自身の反省を促すためにも，教育センターと連携して治療を開始することになった。

(1) 学校も家庭も面白くない。などから……（第１回面接 ～ 第３回）

そういうN男の心情に真剣に耳を傾けることから治療は開始された。第１回の面接で，「学校の指導は，今年から服装，髪型が特に厳しくなった。」「いまさら，自分が真面目にしてもおかしかもん。」と，学校や教師に対する不満を吐きだすとともに，「父は酒を飲むと愚痴，小言が多く，あまり話したことがない。」と，話したくても相手になってくれない父親へのいらだち等，満たされない空虚さや抑圧が吐露された。

また，「自分でやったことは，自分で責任をもつように」「おまえにまかせたら何でもするように。」と父親自身面接指導の中でN男を尊重し，自主自発性を認めるにつれて明るくなり，家族一緒に行動するようになった。しかし，思うようにならないと反抗し，まだまだ生活態度に不規則な面があった。

(2) 自分自身の弱さから，両親に迷惑を……（第４回 ～ 第８回）

治療者がN男，両親の気持を受け入れ，お互いに理解を深めるうちに，N男自身の「いらだち」も消え，自己をみつめようとする気持が深まっていった。そして，「自分自身が弱く，根気がなくて，あきっぽい。また，悪いことをした時，どうしてやったのか自責の念にかられるが，時がたつと忘れてしまう。」「両親と一緒に来るのはいいが，両親が職場を休んで来なければならず，職場の事が心配である。」と，自己をみつみるとともに両親への思いやりの心も芽生えてきた。また家庭においても，N男の急激な変化にとまどい，N男の考えや気持ちを受け入れず，拒否的だった両親の態度も治療が進むにつれて次第に変化を見せ，N男をはげまし認めるようになってからは，すっかり落着きを取り戻し，勉学にも意欲を見せはじめた。

学校における指導も，停学解除時に学校長より「自分をしっかり見つめ，規則正しい生活をするように。また，友達を大事にして，一日も早く学習面の遅れを取り戻しなさい。」とはげましを受ける。それ以来，「授業中もよく聞いているし，騒がなくなった。」「友達の誘いを断っても，友達も自分の立場を解ってくれるようになった。」と，いきいきした意欲的なN男に変っていった。

(3) 自分のことがわかってきた。だから……（第９回 ～ 第１５回）

途中，過去の交通違反が明るみにでて，一部教師からは退学という声もあったが，「どんな処分も甘んじて受けるつもりでいる。もう一度機会を与えて欲しい。」というN男の強い願いが通り，「停学」となる。

学校では，反省日記の提出，勉学の遅れを取り戻すための居残り学習や読書指導が続けられた。そして，「いままで周囲の迷惑や，相手の気持ちを考えずに行動した事を冷静に見つめることが出来ず，ついカァッとなっていた。」と何回となく繰返した非行を自分の力によって見つめられるようになり，「自分自身をもっと深くみつめて行動したい。」と落着き，問題を起こすことなく，安定したN男になり成績も向上していった。

まとめ

(1) 事件発生毎の生活指導部の体制は，各教師ともかなりの禁止，叱責，罰など対症療法的な指導に終始し，N男を理解し共感的許容的な雰囲気に欠けていたことが，教師反抗，不信となって問題行動の繰り返しになっていった。

(2) 反復非行に対して，ややもすると，「退学」「自主退学」としがちな生活指導部も，教育相談係，ホームルーム担任との協議により，教育相談的配慮をもって，N男を立ち直らせる指導が進められると同時に，勉学に対する意欲が生じてきた。

(3) 生徒処分は，教育上必要なこととはいえ，真に教育相談的配慮をもって慎重かつ的確に行い，全教師が各分野で問題要因の排除と改善に努めることが必要である。

特に，教師間の共通理解と日頃から可能な限りねばり強く指導されることが，早期発見早期解決につながるものである。

お知らせとおねがい

従来から備えられていた町村史に加えて，このたび，たくさんの史誌をご寄贈いただきました。各方面各位の熱いご支援ご協力により，一層，資料センターとしても整ってまいりました。県下の教育研究に，より一層の力を添えることができます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

佐賀市史　上・下巻
佐賀市史　１・２・３・４巻
新鳥栖市史
嬉野町史　上・下巻
牛津町史
上峰村史
鹿島市災害誌
佐賀県史　上・中・下巻

新しく加わった史誌
鹿島市史　上・中・下巻
鹿島市史資料編　第１集

久保田町史　白石町史　兵庫町史
神埼町史　厳木町史　七山村史
川副町誌　富士町誌　大和町史
三田川町史
太良町のあゆみの記録

児童によませたい詩

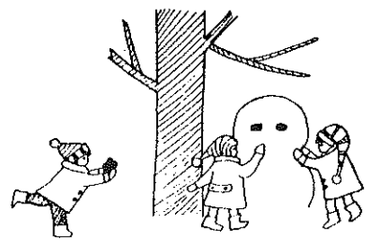
クロツグミ

高村光太郎

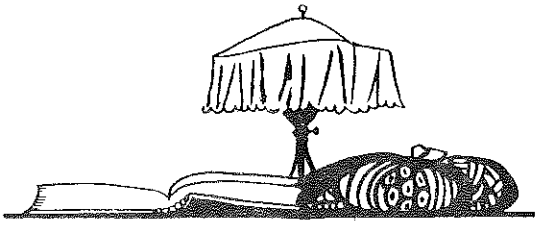
クロツグミ　なにしゃべる。
畑の向うの森で　いちにち　なにしゃべる。
ちょび　ちょび　ちょび　ちょび
ぴいひょう、ぴいひょう、
こっちおいで、こっちおいでこっちおいで、
こいしいよう、　こいしいよう、
ぴい、
おや、そうなんか、クロツグミ。

紹介　昭和55・56年度
基礎学力向上研究推進校とテーマ

校種	学校名	研究テーマ
小学校 (5)	芦刈小	自ら学ぶ態度を育てる学習指導法の研究
	麓小	基礎学力向上 ― 算数科を通して ―
	鏡山小	基礎学力を伸ばす学習指導 ― 国語・算数 ―
	江北小	基礎学力の向上をめざす実践的研究
	鹿島小	ひとり歩きをめざす学習指導 ― 自ら考え判断しつくり出す能力の育成 ―
中学校 (6)	諸富中	基礎学力の向上をめざす指導法の研究
	神埼中	基礎学力向上の一方策
	鳥栖中	基礎学力の向上をめざす研究 ― 学習意欲を起こさせる指導 ―
	七山中	自ら学び高めあう学習指導 ― 基礎学力の向上をめざす実践的研究 ―
	福富中	基礎学力の向上をめざして ― 学業指導を中心に ―
	嬉野中	学力の向上をめざしての実践と研究
高等学校 (9)	神埼高	生徒の意欲的学習態度・習慣をいかに身につけさせるか
	佐賀西高	学力向上のための学習指導と学業指導
	小城高	本校生徒の学力差に対応する指導の研究
	武雄高	主要教科の基本的知識の習得をいかにはかるか
	鹿島高	中高教育の一貫と学力向上対策について ― 自発的学習のための個別指導の強化
	伊万里高	基礎学力向上の推進
	伊農林高	各学科の中核的科目と補完・深化的科目における基礎学力向上
	唐津商高	高業に関する基本的科目の基礎学力を養う
	鳥栖工高	①自信をつけるための核づくり運動について　②基礎計算力の向上対策 ③漢字テストによる文字力の向上
備考	研究テーマについては，一部要約して記載している。（資料提供　学校教育課）	



"文献紹介"

教育センターに寄贈されている紀要の紹介をします。「基礎学力向上」に関する研究と思われるものの一部を紹介することにします。

紀要番号	発行所	研究主題	発行年度
79−21	有明東小	国語の表現力を高める指導（授業研究記録）	1979
80−191	大川小	一人ひとりがいきいきと取り組む学習集団をめざして ― 国語科における文学教材の読みを中心として ―	1978
80−376	滝野小	学習意欲を高める算数科指導法の研究	1978
79−698	岩松小	学習意欲を高める算数科指導法の研究	1978
80−422	西有田中	わかる授業の深化をめざす実践的研究	1978
80−419	伊万里中	基礎学力向上のための方策をどう講じたらよいか ― 授業改善をとおして ―	1979
79−618	鹿島西部中	基礎学力向上をめざして教科別研究の推進	1978
80−381	思済中	「教育工学」― 学習の効率化をめざす指導過程の研究	1979
78−1210	鹿島高	社会科（日本史）教育上の指導方法について	1978
79−626	佐賀東高	学習指導の拡充と深化をめざす教育機器の利用	1979
78−810	佐賀西高	基礎学力向上研究推進結果報告	1980
79−606	伊万里高	高校選抜学力検査に表れた 学力（数学）不振生徒の追跡調査とのその指導	1978
80−16	北海道立教育研究所	授業目標の明確化と授業過程の最適化に関する研究	1980
80−112	札幌市教育研究所	児童・生徒の能力・適性に応じた最適な学習指導の開発に関する研究	1980
80−211	阿南市教育研究所	学習の改善をめざして ― 主体的学習の探求　（小）	1980
80−175	千葉県教育センター	学習指導の改善に関する基礎的研究（1） ― 英語学習における中高の一貫性をどう図るか ―	1980